住まい備忘録 第21回

風土と住まい

㈳日本建築家協会 沖縄支部会員
永山　盛孝（㈲設計工房）

心地よい住まいとは

るく開放的にしたいというのが蒸暑地帯沖縄の住まいづくりの基本である。その原型は沖縄の伝統的な民家にあり、北中城村にある中村家を借りて、一夏快適に過ごしてみたいといつも思っている。

最近、メキシコの建築家ルイス・バラガン設計の一連の住宅を見る機会があった。メキシコシティは高地にあり、乾季の日中の気温は沖縄と変わらなく暑いが、夜になると涼しくなる。また空気が乾燥しているので室内ではクーラーがなくても不快感はない。日本の建築家にも大きな影響を与えたバラガンの設計した住宅は、光の入れ方が実に巧妙で、空間の広がりと連結を巧みに演出して見せてくれる。バランスのいい窓は殆どがはめ殺しであり、外気を取り入れる開口はわずかしか開いていない。また特徴のあるピンクや青、黄色などの強烈なカラーはアステカ文明の色彩に繋がり、その場所にあって違和感は全くない。その様なバラガンの設計した住宅はメキシコの風土の中で成立するものであり、日本の雑誌でよく見る〝バラガン風〟の住宅は全くクレイジーとしか思えない。

沖縄で明るく開放的な住宅にするために、狭小敷地でどのようにすれば快適になるのかを自邸で実験的にやってみた。伝統的民家の石垣や屋敷林に代わるルーバーによって、内部を開放的にすることができる。また採光は窓から入る水平の光とヨーロッパで見る垂直の光を併用することで、室内に十分な明るさを確保した。娘は天井から光が入る屋根裏部屋を要求したが、それには応えず地下に子供室を置き、屋根にガラスをはめ込んだ。全くクレイジーな手法だが、ガラスには遮光用のグレーチングが施してあり、今では空き室になったその子供室は仕切り壁を取り払い、女房が趣味の部屋として重宝しているようである。

「明るくて風通しのよい家にして下さい」と、住宅の設計を依頼する建築主の殆どが要望する。外には有り余るほどの陽光があっても、住まいは明

バラガン邸（メキシコシティ）

中村家（北中城村）